

目標に準拠した評価の実施について

- 評価規準及び「評価から評定へ」 -

平成17年度版

目標に準拠した評価と評価規準の基本的な考え方

ここでは、「目標に準拠した評価」(以下「目標準拠評価」と表記)と「評価規準」についての基本的な考え方を示します。各科目ごとに目標に準拠した評価を実施するには、以下の手順が必要です。

1 目標の設定

「学習指導要領」の教科・科目の目標に従った、「学習指導の目標(ねらい)」を設定しなければなりません。

2 観点別評価の実施

1の教科・科目の目標は全体としての抽象的な実現状況を示しており、この目標から達成度を評価することは困難です。そこで、評価に当たっては、目標をいくつかの観点に分けて評価(観点別評価の実施)し、その後にそれらの評価を総括することとなります。

3 評価規準の設定

目標に到達しているかどうかを評価するためには、「学習指導の目標(ねらい)」が実現された状態が具体的に想定されていなければなりません。その具体的な想定が評価規準です。

言い換えれば、生徒の学習状況を測定する際の物差し(スケール)であり、「学習指導の目標」を観点別にとらえるための、具体的な視点です。

基本部分は学習指導要領とその解説に従いますが、各単元(題材)ごとの評価規準など授業の実施を想定したより具体的な部分については、各学校の実状に即して作成する必要があります。

「評価規準」と「評価基準」

・「評価規準」...評価のよりどころとなる学習指導の目標をその内容で示したものの。質的な物差し。

・「評価基準」...「規準」の目標をどの程度達成できたか判定するための量的な物差し。

4 評価方法・手段の確立

「目標準拠評価」は、目標(ねらい)の実現状況を評価規準に照らして測定するものですから、評価規準を作ると同時に、評価方法・手段が準備されていなければなりません。

5 指導と評価の計画の作成

評価規準にもとづき、どの指導場面でどの評価を行うかということについて、少なくとも単元(題材)ごとの計画が作成されていなければなりません。

6 評価から評定への総括方法の確立

観点別に実施した評価を評定に総括する方法を確立しておかなければなりません。新しい評価がこれまでのような「知識・理解」のみに偏らないものである以上、従前のおりの定期考査と小テストを中心とする評定ではなく、上述した評価方法により4観点にわたって実施した評価を評定に総括する方法を定め、生徒に説明できる状態を確立しておかなければなりません。

「評価から評定への総括方法」については、次ページ以降に具体例1・2を示します。

「評価から評定への総括」の例1

< 特色及び問題点 >

定期考査の観点別集計、全体の観点別の評価を明示しない形式。

長所...これまでの普通の高校で行われていた評価方法の発想から大きくずれておらず、扱いやすい方法となっている。

課題...観点別の視点からの評価という形にはなっているが、観点別の評価示さない形となっており、評価規準を設定した評価の道筋が途中で失われている。説明責任の合理性(貫徹)という点からは、無理がある。

補助簿1 (場面ごとの評価の記載する補助簿) の説明

単元(題材)ごとの学習など、あらかじめ「指導と評価の計画」によって実施を予定していた評価の場面ごとの評価記録である。

略記号は、それぞれ、【関】=関心・意欲・態度、【思】=思考・判断、【技】=技能・表現、【知】=知識・理解 を意味する。

【関】・【思】・【技】については、A(充分満足できる状況)・B(おおむね満足できる状況)・C(努力を要する状況)で評価している。

【知】については20点×2回、10点満点×1回の小テストの点数をそのまま示している。

中間・期末考査については、素点をそのまま数値で示している。

前期評価の補助簿1 (評価場面ごとの評価の記録と観点別の集計)

番号	氏名	第1部課題									第2部第1章青年					第2部第2章経済と福祉					考査		小テスト										
		メディア・リテラシ	科学技術	科学技術	科学技術	科学技術	科学技術	社会福祉	社会福祉	社会福祉	社会福祉	大量生産と画一化	ポ・ダ・レス化の調査	日本の高齢化社会の問題点	青年期とはアンケート	心理テスト考察	帰納法と演繹法の違い	日本人とは何か	日本人は無宗教か	現代日本の経済の相	最近の企業の動向レポート	規制緩和についてレポート	資本主義と社会主義の相違	パブルとは何か	この15年間の経済レポート	なぜゼロ金利	討論財政・金融の問題点	発言・机間指導	中間考査	期末考査	小テスト	小テスト	小テスト
1		A	A	B	B	A	A	A	B	A	A	C	B	B	A	A	B	B	A	B	B	B	B	A	A	A	B	A	85	75	15	20	10
2		B	B	B	B	B	B	C	B	B	B	B	B	A	B	B	B	A	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	65	55	8	12	9

注1 評価項目最下部の記号 **P**プリント **質**質問紙 **レ**レポート **ア**アンケート **テ**テスト **観**行動観察
 注2 「発言・机間指導」等の欄は、この補助簿とは別に、出席確認簿などに、授業中の優れた発表などを評価・記載して、前期・後期ごとにABCで示している。

補助簿2 (補助簿1から前期評定を算出するための補助簿)

補助簿1の各観点別の評価を点数化。

各学校毎(または教務内規等)に決められている換算表により、10段階評価・5段階評定に換算

前期評価の補助簿2

番号	氏名	【関】	【思】	【技】	【知】	発	定期考査		合計	10段階評価	5段階評定
		換算点数	換算点数	換算点数	換算点数	換算点数	中間	期末	換算点数		
		80	80	80	50	10	100	100	200		
1		61	58	77	45	10	85	75	160	82	9
2		50	56	57	29	5	65	55	120	64	7

- 補助簿1の【関】【思】【技】をA=3 B=2 C=1として点数化。満点は以下のとおり。
 【関】7項目=21点 【思】11項目=33点
 【技】9項目=27点 【知】小テスト=50点
- これを左表の80:80:80:50に換算。
 例 【関】は、個人合計点数×80÷21
- 「発言・机間指導」は別にA=10 B=5点 C=1点に換算。
- 定期考査については、単に知識理解を確認する問題だけではなく、技能・表現、思考・判断を問う問題を含めることとし、但し、全体として、考査独自で点数を集計。

・この結果、左表の換算点数の合計は、500点となる。評価判定点数はこれを5で割って100点としている。
 ・評価判定点数は、各学校の規定に従い10段階評価へ換算。
 例 100~90=10 89~80=9 79~70=8 69~60=7 以下略
 ・10段階評価は、各学校の規定に従い評定へ換算。例 10÷9=5 8÷7=4 6÷5=4=3 以下略

「評価から評定への総括」の例2

< 特色及び問題点 >

定期考査を観点別に集計し、全体の観点別の評価を表記する形式。

長所... 観点別の評価を正しく実施する方法となっている。

課題... 定期考査の観点別集計など、評価の計画性、処理の煩雑性の克服など、より緻密な対応が必要である。

補助簿1 (場面ごとの評価の記載する補助簿) の説明

単元(題材)ごとの学習など、あらかじめ「指導と評価の計画」によって実施を予定していた評価の場面ごとの評価記録である。

略記号は、それぞれ、【関】=関心・意欲・態度、【思】=思考・判断、【技】=技能・表現、【知】=知識・理解を意味する。

【関】・【思】・【技】については、A(充分満足できる状況)・B(おおむね満足できる状況)・C(努力を要する状況)で評価している。

小テストについては20点×3回分をそのまま点数で記載している。

中間・期末考査については、【知】のみならず、【思】【技】の観点を問う問題も出題し、観点別に得点を集計。【思】:【技】:【知】=15:15:70の割合とし、素点で記載している。

前期評価の補助簿1 (評価場面ごとの評価の記録と観点別の集計)

番号	氏名	【関心・意欲・態度】								【思考・判断】								【技能・表現】								【知識・理解】													
		1 科学技術 発展への意欲課題	1 社会福祉 問題点の把握	1 社会福祉 発表評価	21 ボーダーレス化の調査	21 青年期とはアンケート	22 最近の企業の動向レポート	22 討論財政・金融の問題点	発言・机間指導	1 科学技術 判定	1 科学技術 発表テマ	1 社会福祉 課題発見	21 大量生産と画一化	21 心理テスト考察	21 帰納法と演繹法の違い	21 日本人とは何か	22 規制緩和についてレポート	22 資本主義と社会主義の相違	22 この15年間の経済レポート	22 なぜゼロ金利	中間考査	期末考査	1 メディア・リテラシ	1 科学技術 資料収集	1 科学技術 調査内容	1 社会福祉 資料作成	1 科学技術 生殖医療問題点	21 日本の高齢化社会の問題点	21 日本人は無宗教か	22 現代日本経済の様相	22 パブルとは何か	中間考査	期末考査	小テスト	小テスト	小テスト	中間考査	期末考査	
1		B	B	A	B	A	B	B	A	B	A	C	B	B	B	B	B	A	A	A	13	15	A	A	A	B	A	A	A	B	A	A	13	12	17	16	18	65	63
2		B	C	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B	A	B	B	B	B	10	5	B	B	B	B	B	A	B	B	B	8	3	10	8	9	35	33		

注1 評価項目最下部の記号 **P** プリント **質** 質問紙 **レ** レポート **ア** アンケート **テ** テスト **観** 行動観察
 注2 「発言・机間指導」等の欄は、この補助簿とは別に、出席確認簿などに、授業中の優れた発表などを評価・記載して、前期・後期ごとにABCで示し、【関】に含めて評価する。
 注3 数字の1は大単元1 現代の諸課題、21は大単元第2部第1章青年、22は第2部第2章経済と福祉の各単元を示す。

補助簿2 (補助簿1から前期評定を算出するための補助簿)

補助簿1の各観点別の評価を点数化。

各学校毎(または教務内規等)に決められている換算表により、10段階評価・5段階評定に換算

前期評価の補助簿2

番号	氏名	【関】	【思】	【技】	【知】	合計	評価 判定 点 合計 ÷	10 段 階 評 価	5 段 階 評 定
		換算 点数 P等 50	換算点数100 P等 70 定考 30	換算点数100 P等 70 定考 30	換算点数200 小テ 60 定考 140	左の 合計			
1		38A	47+28=75A	64+25=89A	51+128=179A	381	85	9	5
2		28B	45+15=60B	45+11=56B	27+68=95B	239	53	5	3

・補助簿1の【関】【思】【技】をA=5 B=3 C=1として点数化。満点は以下のとおり。
 【関】8項目=40点 【思】11項目=55点
 【技】9項目=45点
 ・これを左表の50:70:70に換算。
 計算例 【関】は、個人合計点数×50÷40
 ・小テストの60点分はそのまま計算。
 ・定期考査の3観点の点数もそのまま計算。
 ・上記の処理の結果、換算点数は、
 【関】:【思】:【技】:【知】=50:100:100:200としている。
 ・合計は、【関】【思】【技】【知】の換算点の合計。満点450。
 ・評価判定点はこれを4.5で割って100点に換算している。

・各観点については、数値換算の点数によって、次のように観点別の評価ABCを付ける。
 【関】50~3540=A 34~15=B 14~1=C 【思】・【技】100~70=A 69~30=B 29~1=C
 【知】200~140=A 139~60=B 59~1=C
 ・評価判定点は、各学校の規定に従い10段階評価へ換算。
 例 100~95=10 94~85=9 84~78=8 78~70=7 69~60=6 59~50=5 以下略
 ・10段階評価は、各学校の規定に従い評定へ換算。 例 10・9=5 8・7=4 6・5・4=3 以下略